

『言語存在論』

野間秀樹 著

東京大学出版会

〈言語〉を根源から問い直す原理論

言語はいかに在るのか——これまで問いとして立てられてこなかった視座から、言語を思考する。言語学的な立場を貫きつつも、談話論やテキスト論、文字論などと呼ばれる、既存の言語学とその境界を越え、言語をめぐるさまざまな思考、そして〈知〉のあり方に迫る。

ISBN 978-4130860543 発売日：2018年11月22日 A5判 447頁 本体 5,500円 税込 5,940円

●著者

言語学者。著書に、『ハングルの誕生——音^{おん}から文字を創る』（平凡社、アジア・太平洋賞大賞）、『韓国語をいかに学ぶか——日本語話者のために』（平凡社）、『日本語とハングル』（文藝春秋）、『한국어 어휘와 문법의 상관구조』（韓国語 語彙と文法の相関構造、ソウル：太学社、大韓民国学術院優秀学術図書）、編著に『韓国・朝鮮の知を読む』（クオン、パピルス賞）、『韓国語教育論講座』全5巻（くろしお出版）など。大韓民国文化褒章、ハングル学会^{チュ・シギョン}周時経学術賞、東京外国語大学大学院教授、ソウル大学校韓国文化研究所特別研究員、国際教養大学客員教授、明治学院大学客員教授を歴任。リュブリアナ国際版画ビエンナーレ、ブラッドフォード国際版画ビエンナーレ、現代日本美術展佳作賞など、美術家としての活動もある。

はじめに

- 第1章 言語存在論とは何か——言語場へ
- 第2章 言語の存在様式と表現様式
- 第3章 音が意味と〈なる〉とき、
光が意味と〈なる〉とき
- 第4章 〈話されたことば〉と〈書かれたことば〉
- 第5章 発話論・文論——言語場から
- 第6章 主述論・省略論——言語化すること
- 第7章 真偽論・時制論・命名論
——言語的対象世界の実践的産出
- 第8章 動態としての言語・動態としての意味

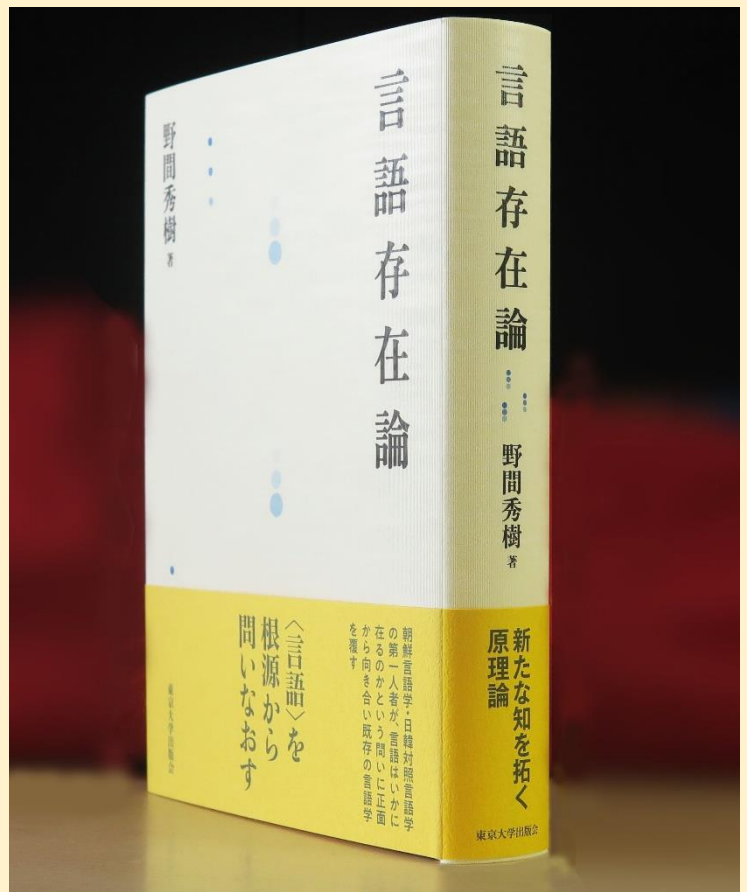
あとがき

参考文献

註

事項索引

人名索引



第1章 言語存在論とは何か——言語場へ

- 1 言語存在論と言語の学
- 2 言語場論
- 3 日本語は在るのか？——「何々語」の内実と輪郭
- 4 言語場と〈文脈〉

第2章 言語の存在様式と表現様式

- 1 音と光——言語の存在様式としての〈話されたことば〉と〈書かれたことば〉
- 2 言語の存在様式と表現様式
- 3 〈話されたことば〉から〈書かれたことば〉へ
- 4 〈書かれたことば〉はいかに生まれるのか——正音エクリチュール革命

第3章 音が意味と〈なる〉とき、光が意味と〈なる〉とき

- 1 言語に係わる意味
- 2 〈書かれたことば〉が意味となるとき
- 3 〈話されたことば〉が意味となるとき
- 4 ことばは意味となったり、ならなかったりする
- 5 〈意味が通じる〉ことから出発する虚構の形而上学
- 6 発話者と受話者の〈意味〉はなぜ異なるのか
- 7 〈意味するもの〉と〈意味されるもの〉の統一という擬制

第4章 〈話されたことば〉と〈書かれたことば〉

- 1 〈話されたことば〉と〈書かれたことば〉の仕掛け
- 2 オト＝言語として在り、ヒカリ＝文字として在る
- 3 〈話されたことば〉と〈書かれたことば〉の〈時間〉
- 4 〈形音義トライアングル〉の仕掛け
- 5 引用論
- 6 〈話されたことば〉の複数の話し手と複数の聞き手
- 7 〈書かれたことば〉におけるテキストの書き換えと重層的産出
- 8 IT革命と言語の存在様式、表現様式の変容——新たな言語場
- 9 言語の存在様式と表現様式の区別が言語教育へ突きつけるもの

第5章 発話論・文論——言語場から

- 1 言語存在論という問いから言語の内を見る
- 2 談話とテキスト、そして発話
- 3 文とはいかなる単位か
- 4 単語(word)の桎梏、文(sentence)の桎梏
- 5 言語を語る〈文〉の病

第6章 主述論・省略論——言語化すること

- 1 〈主語—述語文〉中心主義の桎梏
- 2 言語事実における〈主語文〉と〈非主語文〉、〈述語文〉と〈非述語文〉
- 3 〈省略〉論——言語化されるということ
- 4 ことばが話し手の「意図」や「目的」の結果だという目的論的言語観

第7章 真偽論・時制論・命名論——言語的対象世界の実践的産出

- 1 言語外現実——真偽論の陥穽
- 2 〈非文〉と真偽値、〈非文〉と自然さ
- 3 「普通の文」と「普通でない文」は連なった広野に在る
- 4 〈不自然〉を胚胎する言語——意味の二項対立が融解する
- 5 空想も嘘も矛盾も語る言語——言語が描き出すもの
- 6 自らに背理する言語——言語は自らのうちに異質なものを蔵す＝言語の自己背理性
- 7 言語存在論が問う時制論
- 8 命名論——名づけから言語的対象世界の実践的産出へ

第8章 動態としての言語・動態としての意味

- 1 〈言語静態観〉の桎梏
- 2 間言語的煩悶——言語の間で動くものたち
- 3 動態としての意味、〈意味同一性〉という物神化
- 4 〈教え＝学ぶ〉言語——言語の本源的な共生性

The Korea Foundation has provided financial assistance
for the undertaking of this publication project.

Ontology of Language

Hideki NOMA

University of Tokyo Press, 2018

ISBN 978-4-13-086054-3

はじめに

言語はいかに在るのか？——これが『言語存在論』と名づけたこの書物の問いである。

言語学は、言語がどのような構造を有するのか、あるいは言語がどこで話され、いかに用いられるかといった点に、大きな関心を払ってきた。これこれの言語が消滅するといったことにも、関心は抱いていた。いつしか生まれ、やがて手が消えゆくものとして、言語が語られることはあった。失われた言語、失われゆく言語、あるいは今日読むことのできない、古代の文字群と言語の関わり、そういった形で言語の歴史、言語の盛衰は論じられてきた。個々の言語についての構造や生態や変容、それらの系譜的な関わりについての、こうした問いに答えるのは、記述言語学や歴史言語学と呼ばれる分野の、最大の任務である。さらに言語とは何かといった問いも、言語学ではしばしば論じられてきた。かかる問いは、一般言語学などと呼ばれる分野で扱われた。

しかしながら、言語と呼ばれるものが、いかに存在するか、といった問いには、言語学書を繙いても、ほとんど出会うことがない。一つ確認しておくなら、「何々が存在するか、しないか」という形の問いは、真の存在論的な問いではない。そうした形の問いが向かう先は、概ね空虚さとは飛び交う、遊戯空間である。およそ「存在するもの」など語り得るものは、単に存在するのではない。常に自らの存在の仕方を開示しながら、存在する。存在するものは、存在のありようを何らかの形で常に自らが示している。ゆえに問いは「いかに存在するか」という形で問わ

『言語存在論』



図17 音の世界に実現する〈話されたことば〉と、光の世界に実現する〈書かれたことば〉という2つの存在様式は、座標軸自体を異にする、位相の異なる鏡像関係にある

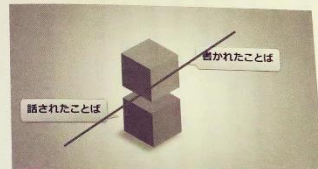


図18 〈書かれたことば〉は〈話されたことば〉の単なる「写し」ではない

本章では「話されたことば」と「書かれたことば」の存在論的なありようを、さらに開いてゆくことになる。実のところ、「話されたことば」に対して「書かれたことば」は、自立した、存在論的なありようの全く異なることばなのだ、言わねばならない。「話されたことば」と「書かれたことば」は、例えはそれぞれを律する、「時間」という決定的な座標軸のありかた自体が、全く異なっている。「話されたことば」からの「写し」であるはずなのに、「書かれたことば」と「書かれたことば」は、それぞれが独自の座標軸がぐにやりと曲がったような、謂わば位相を全く異にする鏡像関係にあると言つてよい(図17, 18)。

2 オート＝言語音として在り、ヒカリ＝文字として在る

(1) 音声言語と文字言語、付与される〈価値〉
この二つの存在様式は、何よりも、音の世界に実現したかたち「言語音」と、光の世界に実現したかたち「文字」という異なる二つありようによって異なる。媒体としての現象形態それ自体がそもそも物理的に異なる。音は聴覚に依拠し、文字は視覚に依拠するといふ違いがある。ただし、媒体としての音と文字と、それらを知覚する聴覚と視覚という構造は、音＝聴覚、光＝視覚といった具合に常に並行しているというわけではない。文字は視覚的な文字ばかりではなく、例えば点字といった、触覚を通して認識する文字も存在し得るからである。ただ点字もまた、前述の点字と異なり、触覚的な文字で

現する(時間)、それらを支える(構造、そしてそこに潜む(引用)という仕掛けを、まず見ることにする。
予め、全体像の概略を図式化しておこう。既存の多くの言語論にあつて、「書かれたことば」は「話されたことば」の写しと思われてきた。〈話されたことば〉を文字に写したものの、あるいは文字によって記号化したものという思考である。第2章第3節(1)でも見たように、ソシユール言語学にあつては、「書かれたことば」は「話されたことば」を「写し」する「写し」

69 4〈書かれたことば〉はいかに生まれるのか

[illegible]

へは、**ン**の字母に加重する
ことによって創る。**ン**が**ン**と
なる。これも小な鼻音である
とされる。また**ン**が発音器官のはば
同じ場所より調音点で作られる鼻音で
あることが、文字の形の上下に反映
されている。ラテン文字を見ても、
ギリシア文字を見ても、もちろん
「た」「な」など仮名を見ても、音
が作られるありようなど、文字の

Bally, Charles	11, 229, 250, 345,	Jespersen, Otto	15, 228	11-12, 51-52, §27, §46, §47,	
§5, 141, §145		Karcevskij, Sergei	22	51, §65, §68, 118	
Barthies, Rudolf	§2, §42, §157	Koffka, K.	§2	Schmitt, Tchevalov	53
Benjamin, Valter	194	Köhler, W.	§2	Searle, John R.	269, 340
Benveniste, Emile	321, 353	Kristeva, Julia	107	Sechevsky, Albert	11
Braille, Louis	134	Lancelotti, Claude	331	Seidel, E.	§88
Brentano, Franz	330	Loech, G.N.	317-318	Seven	257
Briemont, Jean	§37	Lehmann, Christian	§145	Sokal, Alan D.	114, §45
Bright, William	§40	Lersch, Eugen	230	Stenbo, Jesper	7
Chapman, Julie	§114	Lewandowski, Theodor	§188, §136	Traugott, Elizabeth	Class
Cho, Yuen Ren	10, §51	Marty, Anton	330	Trubetzkoy, N.S.	§33
Chomsky, Noam	16, 304, §31	Marx, Karl	§43	Vachok, Josef	224, §26
§9, §11		Mathesius, Vilém	249	Vygotsky, L.S.	6
Coulthart, Malcolm	§109	McLuhan, Marshall	7, 184, §2, 42	Wehrheimer, M.	§2
Courtenay, Baldoyn	§73	Merrleau-Ponty, Maurice	9	Wittenstein, Ludwig	32, 335, §36, §19
Daniels, Peter	§7, §47, §59	Milton, John	252	Wunderlich, Dieter	§109
Derrida, Jacques	101, 129, 169, 298, §30, §47, §67, §68, §154, §155	Moi, Raoul	§212	Zaid, Edward N.	§136
Dieck, Philip K.	318, §132	Mosseley, Christopher	351	Zamenhof, Lazarus Ludoviko	§160
Dummett, Michael	138	Moskva, Nikolai	§3	Zetser, Hermann	230
Everett, Daniel L.	332, §141, §142	Org. Walter J.	44, §191, §42	Бахтин, Михаил Михайлович	26
Evans, Gerry	4, §18	Orwell, George	318	Виноградов, А. А.	230
Frege, Gottlob	32, §63, §128	Peirce, Charles S.	§108	Волочин, В. Н.	26
Frankel, Tony	23	Plato	§2, §42, §49	Выготский, Лев Семёнович	6
Garcia, Stefan	326	Polanyi, Michael	§29	Давыдов, Ш. В.	§19
Gerge, Zellig S.	§49	Quine, W. V.	253, 274, 369, §115, §149	Каревский, Сергей И.	229
Hedges, Martin	8, 326, 352, §357, §4, §5, §134, §152	Ries, J.	230, §88	Климов, Г. А.	88
Hopper, Paul	§145	Rollinger, Robin	§136	Несвий, Николай	83
Humboldt, Wilhelm von	16, §10	Sack, Bertrand	251	Трубецкой, Н. С.	§33
Ivan, R. A.	159, §42	Sallabank, Julia	351	Филин, Ф.	§103
Johnson, Roman	§48	Sanders, Barry	159, §42		
		Sapir, Edward	§2, §135		
		Saussure, Ferdinand de			

数字アルファベット

ナビグ・アクトス 197, 203-
 ナボロジー 9
 ナブゲダ 註 59
 ナブツド 註 59
 ナブツ 333
 網と雲 218
 アメリカ英語言語学 註 52, 註 135
 ノリ 314
 ノリで用いられるナクスト 209
 ノリツツ 184, 189
 ノリツツ 88
 ノリツツ数字 162, 256
 ノリツツ文法 124, 140-141, 註
 59
 形(あひかた)ノ詞(ことば)
 註 13
 あひう(を示す) 1, 355
 あひカノ語法 185
 アメリカブツト 74-75, 90, 145-
 146, 148, 151-155, 157, 159-
 162, 註 59
 アメリカ文法 361
 「アルファベットの」 284
 アンジェマン 註 37
 暗示的意味 115
 「アンディ」は電気羊の夢を
 見るか 318
 暗然然 註 55, 註 28
 いはい 209

あいつち 190, 222, 註 85
あいつち発話 註 70
相手と重なる発話 287
アイズ語 29
曖昧化/曖昧性 105-106
曖昧な/曖昧な意味 115,
163
曖昧に実現する意味 105
アオリスト 325, 註 133
アクセント 13, 66
アクセント表記 233
変形態素 186
アナキーな言語場 205
アナグラム 178, 註 64
アナグラム研究時代 註 64

語彙 149
一人名 235-236, 274, 283, 344
二名 62
一人名 記 122
一人名の人物 290
一人を二人とした文法の記述 記 110
一物 201
一種の構文 362-363
一般 248, 258
一般語彙学 i, 355
一般言語学 11, 119, 350, 358
一般人 247-248
一般的な意味 249
一般文法 記 140
一般名辞 記 149
イデオロギ- 208
イデオロギ-操作 206
収得 252, 270, 298-300
移動 211
異文化 106
異質性 142, 314
い-ま こ 112, 126-127, 130, 132, 209, 315, 319, 321-322
いま こに - 新たに - 実現する意味 374
意味 374
意味 *v*-li, 23, 25, 95, 100, 148, 153-160, 163-164, 210, 212, 244, 248, 296, 311, 336, 337, 359-360, 364, 367, 370, 374-375, 124, 128, 158
意味 (発話者と受話者の) 112, 113
意味が実現しない 103
意味が実現する 109
意味が自由になる 111
意味が用 9
意味作用するもの 36, 117-118
意味するもの 36, 117-119
意味づけ論 記 42
意味論的な分析 304, 310
意味と意義 365
意味同一性 359-360
意味同一性の特異性 119
意味と機能 219
意味とことば 219
意味とことばで実現しない 97-98